



 Data	2023-42
監督: オリヴァー・ハーマナス	
脚本: カズオ・イシグロ	
製作: スティーヴン・ウーリー／エリザベス・カールセン	
原作: 黒澤明監督作品『生きる』	
出演: ビル・ナイ／エイミー・ルー・ウッド／アレックス・シャーブ／トム・パーク	

みどころ

世界の巨匠、黒澤明作品のリメイクは、『七人の侍』（54年）をはじめ意外に多い。しかし、『生きる』（52年）はあの時代の日本なればこそ成立した感動作だから、リメイクは無理。そう思ったが、何とイギリス版『生きる LIVING』をノーベル文学賞作家カズオ・イシグロが企画し、自ら脚本を！

監督も主演も私は知らない人だが、クロサワ版の基本枠をそっくり踏襲しながら舞台を1953年のロンドンに移し、「ゴンドラの唄」をスコットランド民謡「The Rowan Tree」に置き換えた本作は、見応え十分。

お役所仕事にがん告知、ヤケのヤンパチのうさばらしにピチピチギャルとの出会い、そして死ぬ間際になっての生きる希望の発見！クロサワ版の感動を本作でも再度確認したい。もっとも、「The Rowan Tree」の素晴らしさを理解するためには、可能なら2度でも3度でも・・・。

■世界のクロサワの『生きる』（53年）が英国でリメイク■

黒澤明監督は『七人の侍』（54年）、『影武者』（80年）、『乱』（85年）等、時代劇の傑作が有名だが、現代劇でも『わが青春に悔いなし』（46年）、『生きる』（52年）、『天国と地獄』（63年）等の名作を残している。黒澤と同じように、日本が誇る世界の巨匠が小津安二郎だが、彼は『東京物語』（53年）をはじめ現代劇ばかりで時代劇はない。時代劇、現代劇を問わず、そんな“世界の巨匠”が残した名作のリメイクは大変な挑戦だから、生半可な監督ではできないが、山田洋次監督のような、“今の時代の巨匠”なれば、それもOK。その結果、『東京物語』から60年を経た2013年に山田洋次監督の東京物語リメイク版『東京家族』（『シネマ30』147頁）が公開された。

その約10年後の2022年、今度は『東京物語』とほぼ同じ1952年に公開された

黒澤明の『生きる』が70年ぶりにリメイクされた。しかし、その監督は誰？志村喬が演じた、あの主演・渡辺勲治役を演じる俳優は誰？ちなみに、『生きる』の中で印象深く歌われていた「ゴンドラの唄」はきっと同じはずだ。そう思ったが、何とそのリメイクは英国映画だったからビックリ！

■企画は誰か？脚本は？監督は？主演は？■

小津安二郎監督の『東京物語』がリメイクできたのは、山田洋次監督なればこそ。一体誰が、世界の巨匠クロサワの名作のリメイクに挑戦するの？私は一瞬そう思ったが、よくよく考えてみると、黒澤作品のリメイクは多い。まず第1に『用心棒』（61年）や『椿三十郎』（62年）は既にリメイクされている。次に『赤ひげ』（65年）はTVドラマとしてリメイクされているし、『羅生門』（50年）は映画やテレビで数え切れないほど製作されている。また、黒澤の代表作である『七人の侍』はハリウッド版『荒野の七人』（60年）としてリメイクされている上、その続編も『続・荒野の七人』（66年）、『新・荒野の七人 馬上の決闘』（69年）、『荒野の七人・真昼の決闘』（72年）として作られている。しかし、『生きる』は1952年という戦後間もない日本の“あの状況下”でこそ成り立つ“純日本的な物語”（？）だから、平成版や令和版『生きる』のリメイクは到底無理。

そう思っていると、何と、2017年のノーベル文学賞受賞作家カズオ・イシグロが、イギリス版として『生きる』のリメイクを企画し、自ら脚本を書いたからビックリ！彼は黒澤映画の“何事も手柄が得られるからやるのではない。世間から称賛されるからやるのではなく、それが自分の成すべきことだからやる。”という人生観に魅力を感じており、それは戦後の日本もイギリスも、そして現代においても変わらないと考えたそう。なるほど、なるほど。

カズオ・イシグロ脚本によるイギリス版『生きる』の監督はオリヴァー・ハーマナス、主演はビル・ナイだ。2人とも私は全然知らないが、予告編で10回近く見たビル・ナイ扮する主人公ウィリアムズは、いつも上質のスーツ、ネクタイ、帽子姿を見事にキメた英国紳士。クロサワ版『生きる』で見た、志村喬扮する人生に疲れ果てうらぶれた（？）主人公とは大違いだ。さあ、そんなイギリスを舞台にした、リメイク版『生きる』の出来は？

■日英の共通点はストイシズム！主人公を対比すれば？■

日本は満州事変から太平洋戦争に向けて1940年に日独伊三国同盟を結び、とりわけ“日独の絆”を深めた。しかし、第一次世界大戦以前の1902年には、日本は日英同盟を結んでいた。日清戦争（1894-95年）に続いて勃発した日露戦争（1904-05年）で日本が辛くもロシアに勝利できたことについては、この日英同盟が大きく寄与している。それは第1に軍艦、第2に戦時歳費、第3に情報だ。

第二次世界大戦当時、日本人は規律性の高いところがドイツ人に似ていると言われたが、カズオ・イシグロは、日本人のストイシズムがイギリス人と共通していると考えたそう。つまり、日本とイギリスの人々に共通する感情はストイックなまでに抑制する力であり、

日本の社会もイギリスの社会も感情を表に出さないことを基本としているそうだ。この分析が正しいかどうかは別として、日英の共通点がストイシズムだとすると、クロサワ版の主人公・渡辺勘治のストイシズムと、本作の主人公・ウィリアムズのストイシズムを対比してみるのも一興だ。

■□■ “お役所仕事” の弊害は日英共通！ ■□■

官僚主義の打破！それは近代の民主主義国家にとって共通の課題だ。日本ではそのためにたびたび“政治主導”が叫ばれるが、有権者の票ばかり気にする政治家はどうしても“人気取り政策”に走ってしまい、有効かつ適切に官僚を使いこなすことができない。中央政府がそうだから、地方政界はなおさらだ。そのため、“市役所”なるものは正に悪しき“お役所仕事”（の弊害）の典型。その中でも、市民課はその最たるものだから、市民課長はその代表中の代表だ。それは、戦後間もない1952年の東京でも、1953年のロンドンでも同じだったらしい。

毎日同じ時刻に出退所し、黙々と書類の山に向かってハンコを押し続け、結果（成果）には興味を持たず、責任を取らなければならないことには一切手を出さないのが“お役所仕事”の基本だ。弁護士の私は、それとは正反対の“一匹狼”として、すべて自分が責任を取る代わりに、成果が出ればそれは全て己のもの、という主義で49年間奮闘してきた。それとは対照的に、市役所の職員として“お役所仕事”を貫いてきたウィリアムズには、ついに今、定年が迫っていた。妻を早くに亡くしたウィリアムズは、2階の息子夫婦と同居しているが、家の中でも孤独で居場所がないらしい。毎日通勤する列車では、わざわざ同僚たちとは別の車両に乗って孤高を保ってきたが、彼の本当の心の中には寂しい思いを持っていたようだ。ところが、ある日、がんを告知され、“余命半年”と告知されると・・・。

■□■ 酒、キャバレー等のうさばらしと無断欠勤はいつまで？ ■□■

敗戦直後の東京は焼け野原になったが、戦勝国イギリスだってナチスドイツからものすごい空襲を受けていたから、被害は大きかったはず。しかし、1953年のロンドン市役所にスーツ、ネクタイ、山高帽姿に正装して列車で通勤する所員たちは、みんな英国紳士だからビックリ！これが、同じ戦後数年の時代でも、敗戦国と戦勝国の違いなのだろう。しかし、定年を控えて、がん告知、余命いくばく宣言を受けた主人公のウィリアムズが絶望し、酒、キャバレー等の享楽に捌け口を求め、それまで休んだことのない役所を無断欠勤するという姿は、クロサワ版の主人公・渡辺勘治と同じだから、“人間のサガ”は日英共通らしい。ただ、ウィリアムズの場合は自宅も大きく、貯金もかなりあったようだから、貯金の半分を下ろし、酒、キャバレー等で遊び回っていると、息子夫婦、特に息子の嫁には目に余ったらしい。そのため、ウィリアムズと息子夫婦、とりわけ息子の嫁との間が陰険になりかけたから、ウィリアムズは自分の病を打ち明けるきっかけすら見つけられず、ますます絶望の淵に・・・。

そんな中、ある日、カフェに転職しようとしている部下の若くピチピチした女の子マー

ガレット（エイミー・ルー・ウッド）とプライベートで出会い、一緒に映画に行ったり、高級レストランでランチを食べたりしているとウィリアムズは・・・？絶望のどん底に落とされた人間が酒やキャバレー等の享楽に走るのはある意味で当然だが、それによって本当にうさばらしができるはずはない。しかし、ピチピチギャルの明るさ、希望、そして前向きな姿勢に接していると、次第に・・・？

■□■自分にできることは？それは地域の公園づくり！■□■

私は1980年代から市街地再開発問題を中心とした都市計画とまちづくりを弁護士としてのライフワークにしてきた。しかして、1980年代に裁判で奮闘した阿倍野再開発問題と、2023年という現在の東京における巨大再開発問題とは全く異質のものになっている。また、今や、人口減少社会におけるまちづくりのあり方が最大かつ最難関のテーマになっている。

私は弁護士として常にそんなテーマを考えているが、ウィリアムズはがん告知を受けるまでは、市民課の課長としてそんなことをこれっぽっちも考えていなかったことは明らかだ。それを象徴する出来事は、地域の公園づくりのために陳情に訪れてきたレディーたちの問題を本作の冒頭に登場する新人の課員ピーター・ウェイクリング（アレックス・シャープ）に任せきりにし、各部局をたらい回しにしたこと。もちろん、ウィリアムズはそうなることを分かった上で、お役所仕事の一環としてそれをやっていたわけだ。

しかし、『坊ちゃん』に見た若き日の夏目漱石と同じように、あだ名をつけるのが趣味だというマーガレットから、自分のあだ名が“ミスター・ゾンビ”だと聞かされた時は、さすがに嫌な顔をしたものの、何度かマーガレットとのデート(?)を重ねていくうちに、彼女にだけ自分の病気を打ち明けるという奇跡のような状況が生まれることに。自分の息子にも話せなかった最大の悩みを、なぜウィリアムズはマーガレットに打ち明けることができたの？その問いと答えはクロサワ版と全く同じだし、そこでウィリアムズが“死ぬ前にやりたいこと”に目覚めるストーリーもクロサワ版と全く同じだ。

そんな決意を固め、一念発起したウィリアムズはある日、雨が降り始める中、多くの部下を引き連れて公園づくりの現地に向かったが・・・。

■□■アレしお葬式？後半は？“ゴンドラの唄”の登場は？■□■

映画とは実に面白い芸術だ。だって、死ぬ間際になって、やっと自分の生きる道を見出したウィリアムズが颯爽と出陣した次のシークエンスは、彼のお葬式になってしまうのだから。といっても、これもクロサワ版を踏襲したものだ。また、ここから始まる後半のウィリアムズが地域の公園づくりに大奮闘する回想シーンは、新入課員ピーターの視点で描かれるのでそれに注目！

他方、クロサワ版『生きる』では、ラストの、ブランコに座った渡辺が一人切々と歌う「ゴンドラの唄」が印象的だった。これはヤケのヤンパチになってキャバレーに繰り出し

ていた時に彼がリクエストして自ら歌った曲だが、クロサワ版『生きる』＝“ゴンドラの唄”と直結するほど有名になったラストシーンであり、有名になった曲だ。しかして、カズオ・イシグロ脚本によるイギリス版『生きる（L I V I N G）』では“ゴンドラの唄”に代わってどんな曲が？それはスコットランド民謡の「The Rowan Tree（ナナカマドの木）」だが、ウィリアムズによるその歌いっぷりとラストの感動は、あなた自身の目でしっかりと！

2023（令和5）年4月6日記